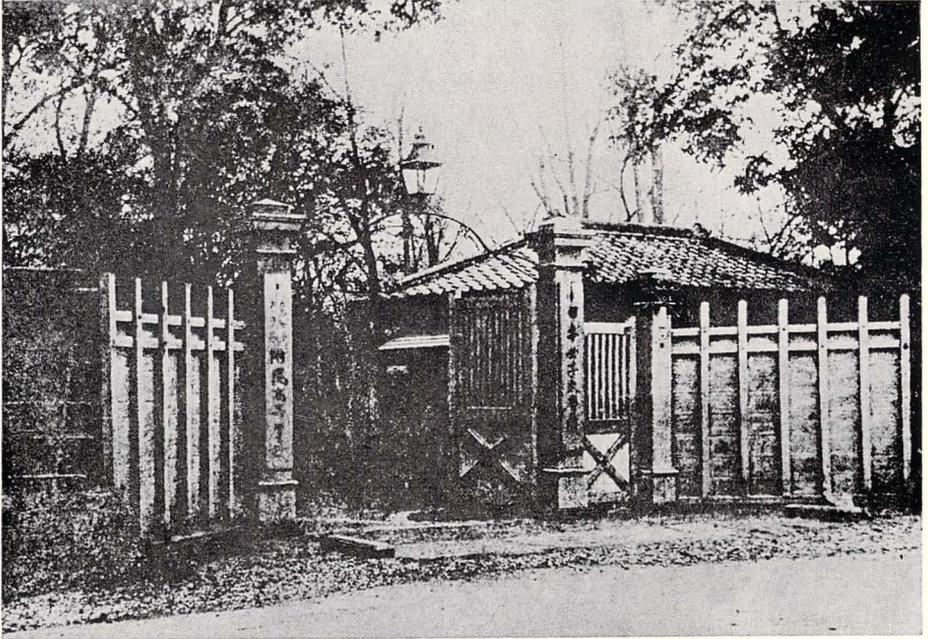


成瀬仁蔵著作集

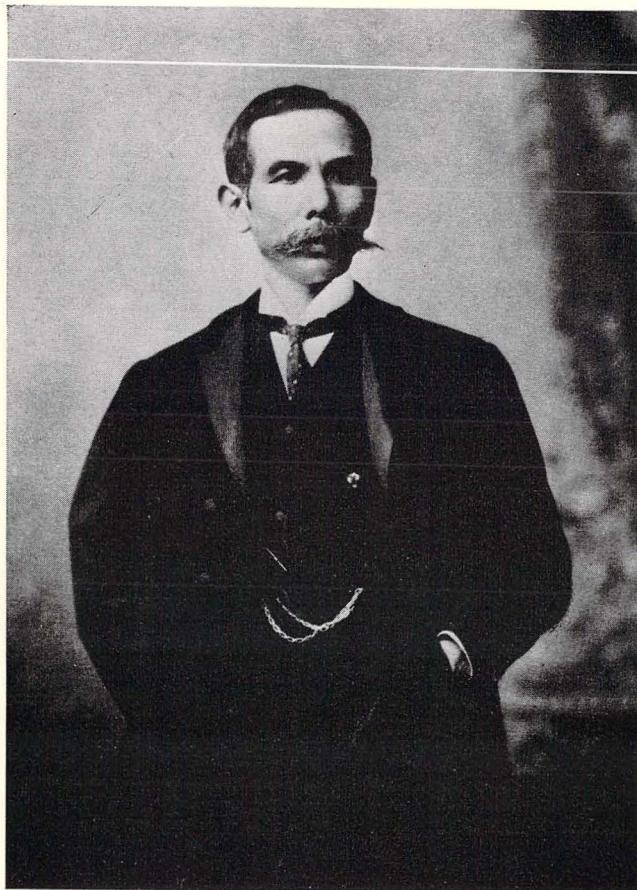
第二卷



創立当時の正門（東京市小石川区高田豊川町18番地）



校舎ならびに寮舎（右より寮舎、校長宅、教師館、校舎）



明治41年頃の
成瀬先生

114

開校式順序

日本女子大學校

明治三十四年四月二十日

日本女子大學校
開校式祝歌
月川安宅作 歌
ドクトル・ケイセル作曲

一
おさまるみよの めくみきて
こゝにつくりし だいごくは
とよさめのほろ りのももに
はじめてなりし ものならめ
つくせ をさめ
つくせ をみな
みくにのため
二
まなみのまどに ちらわがき

三
ちもそのさくら つちがへよ
みねにふしれき 光らきもの
けたかくまきき ものまどに
(まきかへし)

四
おもへはれもき つこめをり
まづらなげをも もろとも
ちからをうへて うるはしく
やまどにしちを かりいでよ

開校式順序

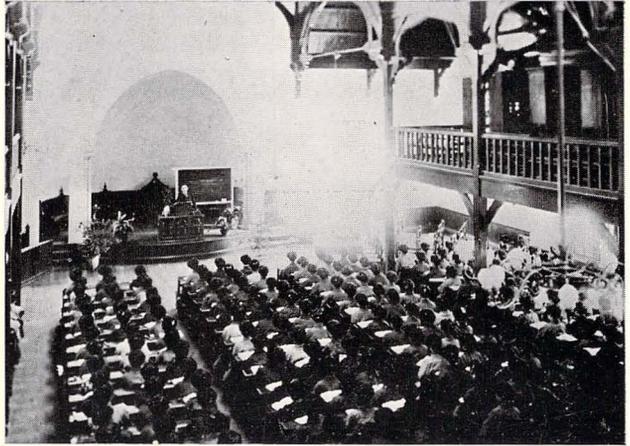


日本女子大学校創立当初の教職員

(前列右より) 富田久子・佐野篤子・前田園子・法貴末子・三輪田真佐子・倉田やす・石原咲子・吉田富貴子・四手井えい子・山本春子・平野浜子
 中列 塩井雨江・岡部精一・小野鶯堂・小笠原清務・成瀬仁蔵校長・小杉楹邨・松浦政泰・湯本武比古・麻生正蔵学監・戸川残花・戸田玉秀
 後列 安井亮・柳井道民・中村梅太郎・村井知至・白井規矩郎・赤堀峯吉
 山崎武八郎・塘茂太郎幹事)

<p>立 食</p> <p>(當日式ノ前後ニ於テ) 教室及演習室等御臨覽下度候</p>	<p>奏 樂</p> <p>大日本女子教育會長公許登堂毛和安子君 東京帝國大學校長若部大藏君 華族女學校長男爵細川潤次郎君 女子高等師範學校長高橋秀夫君 女子教育總協會委員長伯爵土方久元君 帝國教育會長若部大君</p>	<p>祝 辭</p> <p>貴賓院議長片岡健吉君 東京府知事男爵千家啓福君</p>	<p>祝 辭</p> <p>文部大臣松田武久公 貴賓院議長公府近衛篤磨君</p>	<p>演 説</p> <p>創立委員會計監督 男爵渡澤榮一 發起人 侯爵西園寺公望 創立委員長 伯爵大隈重信</p>	<p>開校ノ辭 (校長成瀬仁蔵)</p> <p>祝 辭 (フクトウバウイニ)</p>	<p>君代代 (同起立)</p> <p>敬語捧讀 (同起立)</p>	<p>奏 樂</p> <p>開校式順序</p>
---	--	--	---	--	--	------------------------------------	-------------------------

開校式順序



成瀬校長実践倫理講義

寮舎前の花園と成瀬校長宅



拜啓時不消清襟慕望之至幸存後陳後
 聞故以累年之重仁僅一回不遇候澤為幸
 校運日進之發達と慕望と亦漸々華固知
 各般施設に其緒就つ傳令十三百
 餘名生徒收容と養括亦萬餘園資産
 有るに在り茲に財団法人設立機運際會法
 事偏貴下北發起人創立委員各任深慮
 元御同情結果外に感激並奉存無回顧
 比當初本邦國運趨勢に女子高等
 教育の急務と感し本校設立議り天下三許
 二方り世論概不尚早の唱甚し仁性時女子教
 育失敗擔憂より反對聲も相起り知し候に
 法策不振時機を當り善金事亦頗る容易
 たり而外幾多困難通過しし拘り各任
 國家の憂ふ御熱誠より此計畫贊助の無
 り且大世論の啓蒙より進更時最初女
 子大學設立の見し至り候是喜本校先聲
 正しく本邦文運一發奮一奮亦決し少
 少非自信候依り評議會會決御り以茲
 謹んで感謝の辭り呈し候恐惶頓首

明治三十八年五月廿七日
 日本女子大學校理事 校長成瀬仁盛

財団法人設立に関する感謝状（案）



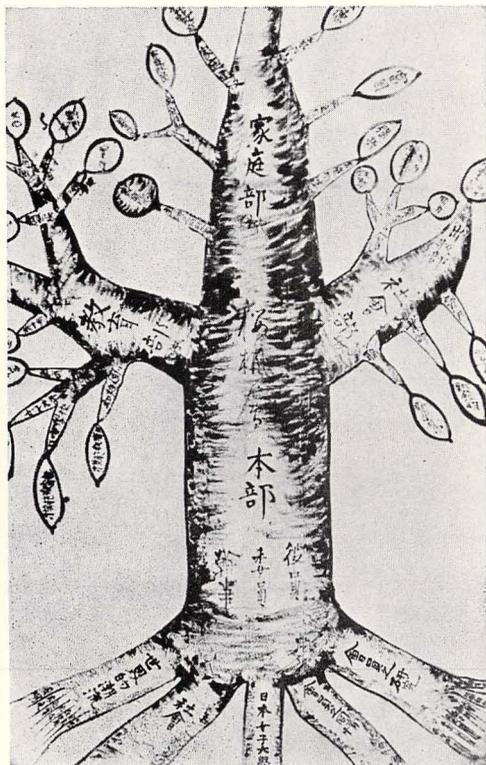
「学報」第一号（明治36年7月）



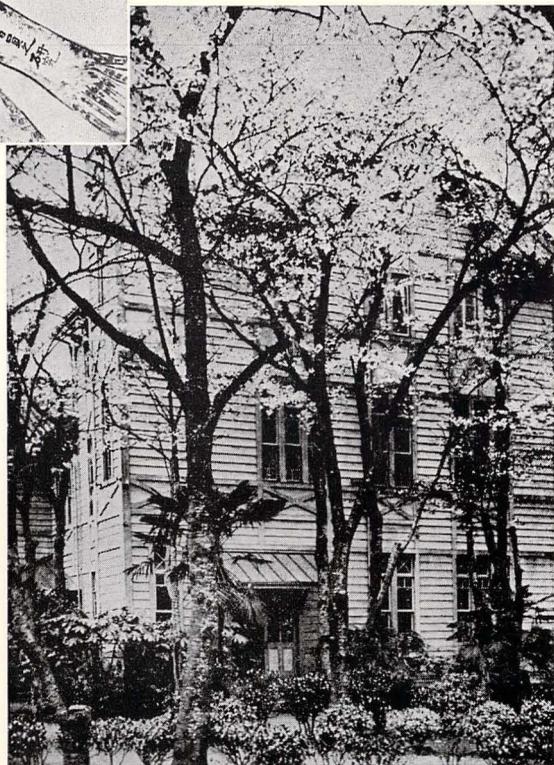
「花もみち」第一（明治38年5月）



「家庭週報」創刊号（明治37年6月）



桜楓樹 (本文466頁参照)



桜楓館 (明治38年9月落成)

本校教育の方針に就て

現則改正に關する校長の演説大意

本校教育の方針に就て (パンフレット)

本校教育の方針に就て

(規則改正に關する校長の演説大意)

我日本女子大學は、今回教育部を開設し小學校幼稚園を附設する時機に際し、従來積み來りたる主義方針に従ひ、尙ほ暫く切實に本校教育の目的を述べんが爲め新たに校内の設備を加へ、教授の方法を改め、之を學年より實施せんす。

今や學年に於ては、本校は家政文學教育の三部となり、文學部は既に國文學英文部の二部に分れ、豫科は普通英語の二科とし、附屬として、高等女學校小學校及び幼稚園と有するに至れり。各部署科の編目は規則に於て之を詳定す。雖も知る所は、本校の教育主として、女子の適宜なる準備を備へたる、教人として婦人として國民として、能く是道の社會に順應し、其發展を完全なる社會的資格を備へたる、教人として良妻賢母たるべき者を養成するに在り。而して、附として其教育の一方に當る結果の要すべきが如く、個人としても唯々専門の學科に偏して他を顧みざるが如きは、決して宜ぶべき傾向にあらざるを以て、此弊を避けんが爲めに各節互に選擇するの備を設け、以て其意味を異にする其性質を因循に發達せしむることを力めたり。又學生をして其學ぶ所のものを、自ら之を實行して自働的發表演説の才能を養はしむることは、本校の専ら意を注ぐ所し、又彼の歐米に行はれんとす、ある「ユニヴァーシティ」の如きは、本校の風に實行し來れる所にして、即ち本校をして家庭社會的工場職業を具へしめ、文學も手藝も音楽も美術も凡て之に包含せしめ、之によりて習得備育を體た完全に行はんと欲すものなり。例せば音楽も美術も、前に島島染織の調理を學び衣食の法を知らしむるに止らず、現代學應用の能力を發揮し衛生經濟の工夫を實踐せしめ、又教育團體を授くるにも、論議物教育の實際と生物進化的狀態

女子大學講義發行の趣旨

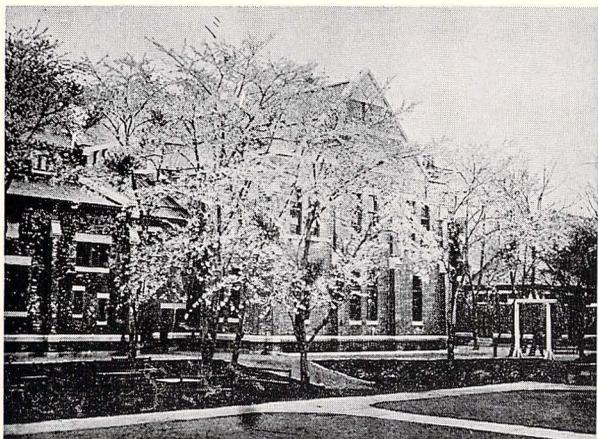
附 日本女子大學通信教育會規則

女子大學講義發行の趣旨 (パンフレット)

女子大學講義發行の趣旨

教育が教室内に限定して訓化の校外に及ぶもの無きは、是れ實に我國教育の缺陷なり。抑も我日本女子大學は設立日尙淺しと雖も、上には家政文學英文教育の四大學部を開き、下には高等女學校小學校幼稚園を置き、設備漸く整ひ基礎亦鞏固を加へ來り、其卒業生は大學部にて七百名高等女學校にて五百名を算し、其團體たる我櫻楓會は、内部の事業稍々其緒に就き、將來發達の素地略々成れるに至れり。即ち茲に本校當初の方針に從ひ、大學擴張運動の端緒を開いて、教育の努力を社會家庭に向つて試みんと欲す。

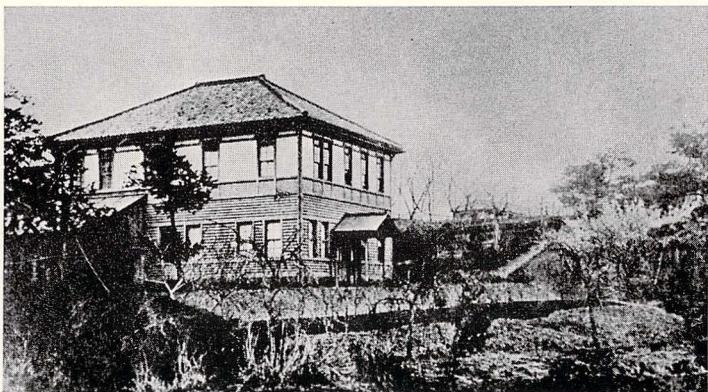
今や女子教育振興の結果として、中等教育を卒ふる所の女子、年々無慮八千に上り、尙連んで高等教育を受けんとする者も亦少なからず。現に我日本女子大學校の如き、部により級によりては満員を告げて謝絶せざるを得ざるの



豊明館
(明治39年4月落成)



寮舎生活
(明治42~43年頃)



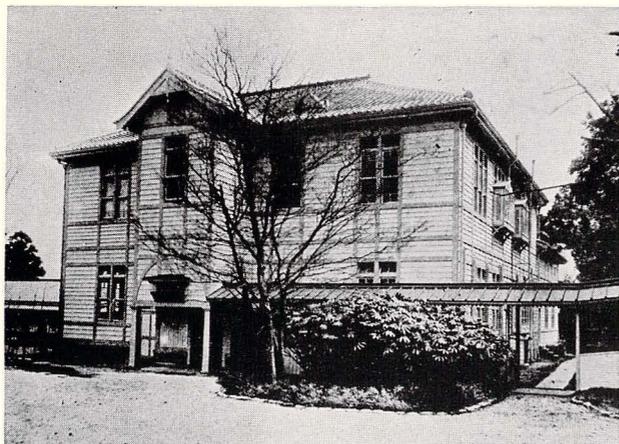
晩香寮
(明治41年開寮)



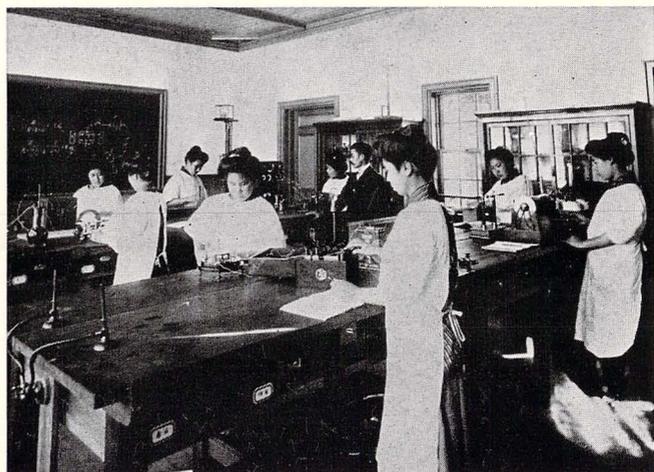
豊明小学校および幼稚園（明治39年4月開校）



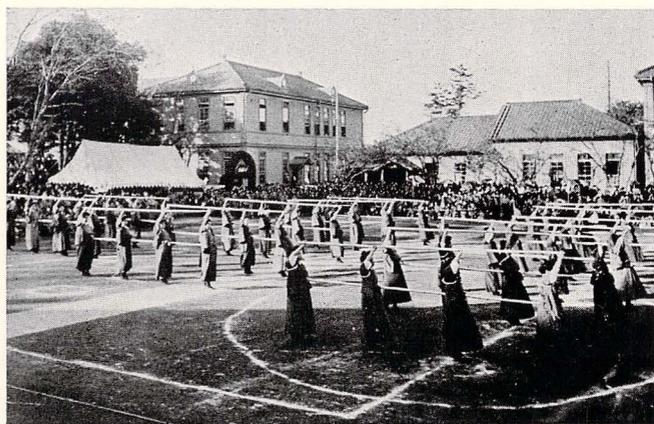
附属高等女学校の授業風景



香雪化学館
(明治41年4月開館)



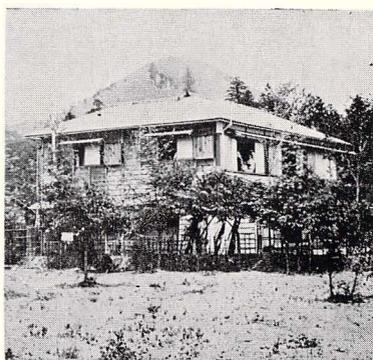
物理実験室
(明治42~43年頃)



運動会



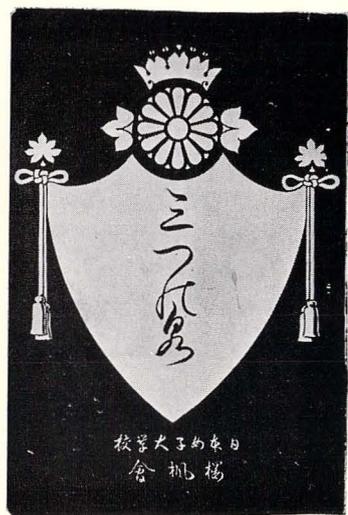
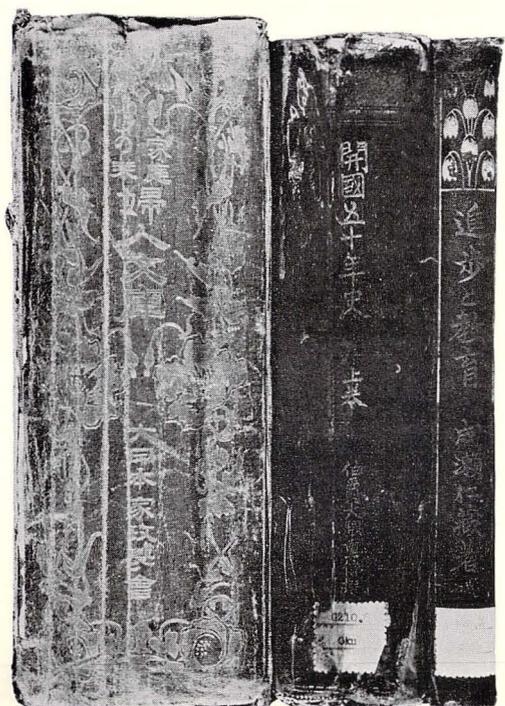
輕井沢に於ける或る日の先生（明治39年頃）



輕井沢三泉寮
（明治39年夏開寮）

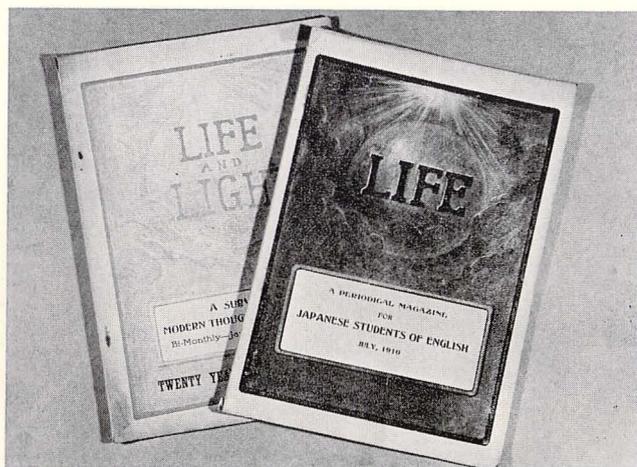


三泉寮開寮当時の夏期修養会

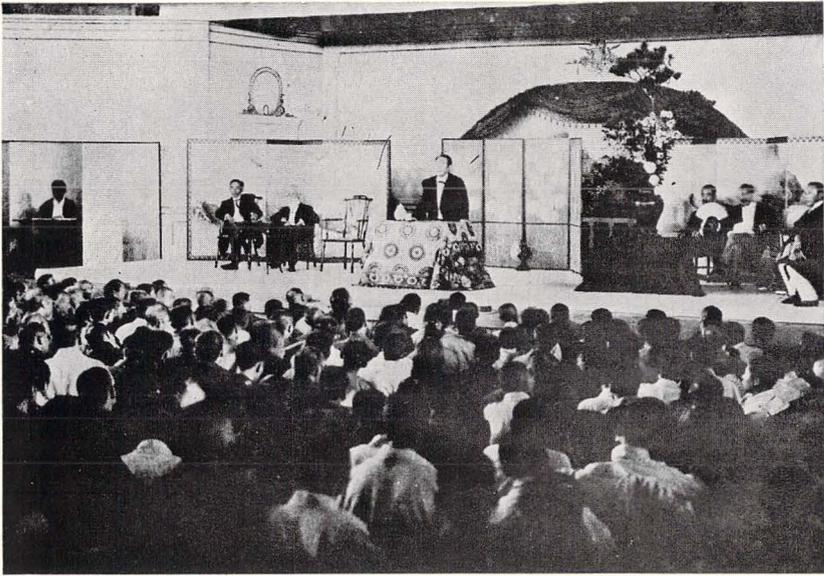


「三つの泉」
(明治39年文芸会の記念誌)

「開国五十年史」(明治40年12月発行)、「婦人文庫」
(明治42年10月発行)、「進歩と教育」(明治44年11月発行)



“LIFE” (明治43年7月発行) ,
“LIFE AND LIGHT” (“LIFE” 第3号より改題)

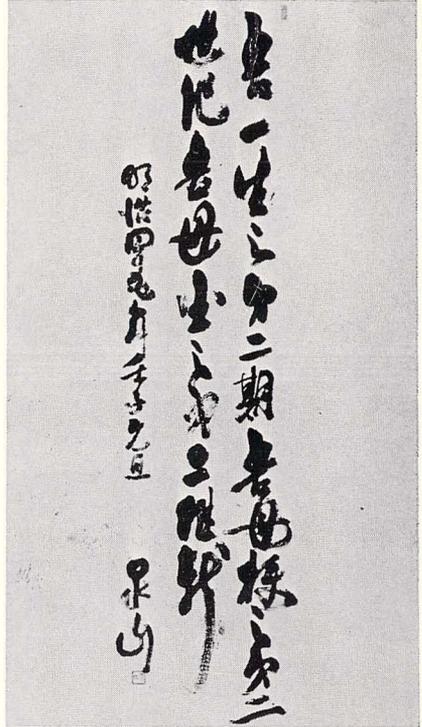
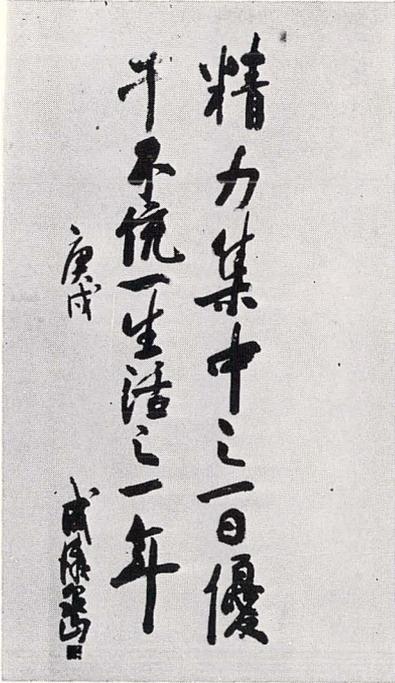


女子教育奨励巡回講演—北越方面（明治43年8月長岡に於て、演壇上は洪沢子爵、その左森村男爵・成瀬校長）

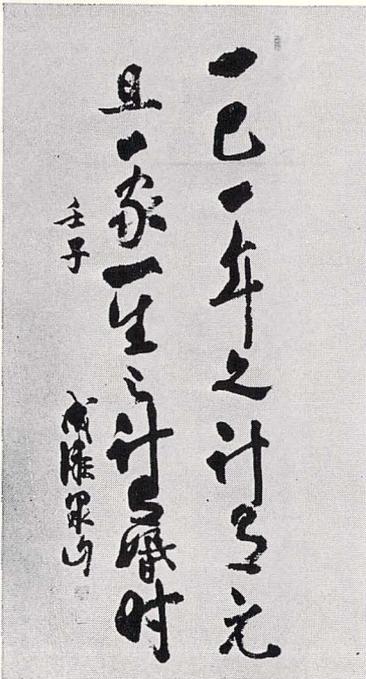


スタンフォード大学総長ジョルダン博士の来校と日本女子大学毎月会会員（明治44年9月）
（前列向って右より三人目、ジョルダン博士夫人・洪沢子爵夫人・洪沢子爵・ジョルダン博士・大隈候爵・成瀬校長・長井長義教授）

精力集中之日優于不統一
生活之一年（明治43年）



元旦試筆、吾一生之第二期吾母校之第二世紀
吾母國之第二維新（明治45年元旦）



一己一年之計元旦一家一生之計有婚時
（明治45年）

